

第2章

(プロジェクト)

窮民に寄り添う金次郎の道 —桜町初期の活動に学ぶ—

客員研究員 萩原 富夫

キーワード

道、誠、徳、廻村、分度、推譲、人倫、融通

1. はじめに

このところ毎年のように、平穏な日常を一瞬の内にして破壊し、その後の惨たらしい壊滅状態を見せつけられて心の痛まない人はいない。自然の非日常がもたらす猛威の前には人間の力など一溜りもない。地震、台風、山津波がもたらした自然災害は、ここ10年の間、毎年のように起きている。しかし、起こされた惨劇の前で人間はただ途方に暮れて佇んでいる訳にはいかない。そこから学び、そこを乗り越えて行く力をまた人間には与えられているようだ。その非日常を乗り越える力は日常の平穏な生活の中に、隣人との相互に「融通」を育み働かせる生活の中の“真理”（誠）として存在しているようだ。

その真理の存在について、幕末に生きた二宮金次郎（以後、金次郎）が弟子に教訓として与えた言葉から何か示唆が受けられるかも知れない。少し長いが書いてみる。

「誠の道というものは、学ばないで自然に知り、習わないでおのずから覚え、書籍もなく、記録もなく、師匠もなく、しかも人々がおのずから心に悟って忘れない、これこそ誠の道の本姓である。のどがかわけば水を飲み、ひもじくなれば食らい、疲れれば眠り、目がさめれば起きるというのも、みなこれとおなじことである。古い歌に、く水鳥のゆくもかえるも跡たえて、されど

も道は忘れざりけり>とあるようなものである。記録もなく、書籍もなく、学ばず習わず、それで明らかな道でなければ誠の道ではない。私の教えは、書籍を尊ばず、天地を経文としている。私の歌に、<音（聲）もなく香もなく常に天地（あめつち）は書かざる経をくりかえしつつ>と詠んでいる。このように、日々くりかえしくりかえし示される天地の経文に、誠の道は明らかである。……天は何も言わず、しかも四季はめぐって万物が生育するところの、書籍のない経文、言葉のない教戒で、米を蒔けば米がはえ、麦を蒔けば麦が実るような、永久不変の道理によって、誠の道に基づいて、誠にする勤めをするべきである。」とのべている⁽¹⁾。

上記の文章は、我々が普段から過ごしている日常の道の中に誠を通して人間が学ぶべき存在が示されていて、その日常の道が誠を通して示す存在を、我々は誠の観察眼を発揮して捉え、それを誠にする努力をしなくてはならない、と弟子達に伝えている。それを示す伝説がある。幼い金次郎が酒匂川の堤の上に立って、来る日も来る日も酒匂川を眺め、その堤に松苗を植えたと言う言い伝えであり、その松並木が今でも残っている。問題は普段から何気なく歩いている道の中にあり、その日常の営みの中にその日常を変えて行く徳の様な存在が隠れている、そう言っている。その問題は日々我々が織り上げている日常の営みが既に誠を通して示されている、というのである。だから我々は誠を発揮して問題であるその存在を掴まなければならないと、金次郎は説いている。日常こそが生きる者にとって誠であり、そこに徳の徳たる存在がある、といっていると思われる。

本稿は、35～6歳まで、小田原で生き成長した金次郎がその日常の過程で、どのような誠を発揮して日常を変えて行く存在としての徳を捉えようとしたか、日々のそうした努力が藩主大久保忠真の眼に止まり、下野国桜町の荒廃農村復興を命じられる。そこにおいて展開された仕法において、自らが培ってきた努力の証であり誠において捉えた存在としての徳がどのように実践されたかを見ようとするものである。それは荒涼とした荒廃農村に立ち枯れしように佇む農民に寄り添う金次郎の行動を以って表現する篤き心の内に観られよう。

2. 桜町の活動

(1) 小田原から桜町へ

多くの二次資料⁽²⁾の教えるところによると、金次郎の70年の生涯はその活動内容から大きく3つの地域で過ごされたことになる。まず初めの活動地は誕生から37歳まですごす小田原の栢山での生活。次の活動地は35歳から準備を始め、37歳になってその生活全てを一家で移すことになる下野の国、小田原藩の分家で、旗本宇津胤之助の所領、桜町3村（物井村、横田村、東沼村）での活動である。最後の活動地は老中水野越前守の命により、幕臣に登用され、利根川分水嶺目論見御用を仰せつかり、その仕事の後、日光今市の天領98か村の窮乏農村の復興事業を手掛けてから間もなく亡くなる3つの活動地である。その道を貫く金次郎の思いは「村ため」（村のために）であり、疲弊する地域農村社会と農民の失いかけた潜在活力を呼び戻すために、長く続いた荒廃とその貧窮に弱り切った人々に対し仁恕の心を持って寄り添い一心にその地の復興を支援することであった。以上の3つの活動から、ここでの研究対象となる時期は、第2番目の桜町での前半の金次郎の活動である。

金次郎は14歳で父親を亡くし、その2年後、16歳で母親を相次いで亡くした。その時点で残された兄弟3人は、弟2人は母親の実家に預けられ、金次郎は伯父の万兵衛家の食客となった。孤独の身の上と成ってしまったその大きな原因となったのは、自然災害であり、一つは冷害であり、もう一つは度重なる酒匂川の氾濫が齎す耕作地の破壊であった。前者については、日本の近世が丁度小氷河期に覆われていて、気象は寒冷傾向にあったと言われる。金次郎の生まれる天明年間とその後の天保年間には全国的な大飢饉に見舞われ、多くの餓死者が出たと言われている⁽³⁾。

後者については、度重なる酒匂川の氾濫は、雨天が続く時、また台風に見舞われれば必ず引き起こされる堤防の決壊であった。寛政3年(1791)8月5日、全国各地で暴風雨による洪水が発生し、酒匂川の堤防も決壊した。こうした自然災害によって引き起こされた洪水が田畑を土砂で埋め尽くし、その過酷な復興作業が早死にした父の身体を痛めつけたのであった。

また、一方で、伯父から許される農作業の休日には、必ず土砂に埋もれた自らに残された田畑の開墾に勤しむ金次郎は田植えを終えた田の畦道の脇に

捨てられた苗を見つけ、それを用無しの空地に植えてみると、秋には一俵もの収穫を得ると言う体験を持った。立ち直りを挫くかの様に繰り返される過酷な自然の猛威の反面で平穏な自然の豊かな恵みの姿があり、それは懐が深く、その自然への一心な働きかけによっては一俵もの米を生みだすことを経験した。この2つの体験が金次郎のいう自然認識がもたらす徳と誠に対する洞察を深め、それが基底となる自らが歩む“道”への生命の宿る創造的な思想をもつに至った。

上記で述べた、捨て苗から収穫した一俵の米は人に貸し、自らは砂礫の田畑の開墾をせさせと続け、仕上がった耕作地は小作に出して、そこから得られた小作料は善種金として貧しい人に差し上げるなり、人に貸す成りし乍ら小さな貯蓄を生み育てて行った。伯父からの独立後、金次郎は親戚や村の地主の家に奉公にあがり、昼間は働き、夜は夜鍋の後独学を続け、24歳で自宅を普請し、所持地、田畑一町四反五畝二〇分を所有するようになる⁽⁴⁾。その後小田原城下に出て、小田原藩藩士川嶋家の中間となる。風祭村の山代を支払い、城下で薪を販売する。二宮一族が金次郎の呼びかけで、総本家再興に向かうことになり、その協力の姿勢が芽生え米の推譲が行われた。

26歳の時に金次郎は、同藩家老服部十郎兵衛家の中間となり、子供の世話係を行い、『經典余師』や『孝経』等を購入し、本格的な儒教の学びを始める。子供の世話だけではなくそこで働く奉公人の世話と相互の協力と家事の在り様まで指導し、その努力が服部十郎兵衛の認めるところとなり、服部家の家政改善を依頼されることになる。そこで「御賄方趣法割合帖」を作り、改善に当る。その改善に当る一方で、「五常講」を組織して奉公人同士の融通意識を高め、その後その五常講組織に藩からの「八朱金」(年8分の利息)の貸下げを受け、下級藩士の家計救済にまで広げる。当然の如く、服部を介して藩士との関係が深まる。文政元年(1818)に藩主大久保忠真から「出精奇特者」として表彰を受け、その表彰を受けた他の数人と共に、藩政改革の一環として大久保家の分家、荒廃を極める下野国桜町の農村復興に関わる改善方法について調査の命を受ける⁽⁵⁾。

文政3年(1820)、金次郎34歳の時、大久保忠真から「末永く御領内百姓どものためになるような事」があれば申し出るようにという仰せ渡しがあった。

金次郎には父の代から長年心の片隅に有ってその改善を望んでいても、なかなかその解決の道に至らない問題、すなわち、「桵」の改善要望があった。服部家の中間になったのも何れはその問題の解決への道に通じる時期が来るはずだとの見込みがあったといわれている⁽⁶⁾。

当時、小田原藩には年貢納入時に使われる桵が18種類も使われていて、一俵という決められた正味が使われた桵によってまちまちとなり、そこに直面した百姓たちは不利益を被ること以上に、丹精を込めて育て作り上げた米が邪な奉行や郡奉行によって人間存在を踏み躪られるような不当な扱いを受け、その度に深い苦渋を嘗めていたのであった。金次郎はこの苦渋を嘗めた話を子供の頃から父親から聴かされており、「誠」への思考の強い彼にとって、心の痼となって常に頭を擡げる問題となっていたのである。

要請によって、金次郎が作り上げた桵は米の字に関係づけて、深さ八寸八分（26センチ余）、縦横の長さ、一尺三厘三毛（30センチ余）の形となる。それが三杯で米が四斗一升となり、一俵に相当すると言うものであった。実際の桵の製造は、規格品ではないので小田原で腕の良い建具職人を見つけ、その者に付きっきりで作らせ、補強の金具も文字の彫も小田原の職人に作らせ完成させた。この桵の製作に掛かった費用は1両であり、総本家再興基金から支払われている。出来上がった桵の献上に当っては、上記の通り城主大久保忠真からの仰せ渡しであり、藩政改革の一環としての仕事であることから、金次郎は『論語』（堯曰第二十）にある「謹権量、審法度」（権量を謹み、法度を審らかにす）という言葉添えて納めたとされている⁽⁷⁾。金次郎はこの言葉の意味にも誠としての行動の意味を見いだしているに違いないと思われる。

既に、酒匂川原において城主大久保忠真から出精奇特人孝行人13名の内の1人として表彰を受けていた。それは郡中取締役となっていた親戚で生活上の助言もしばしば受けたと思われる、栢山村名主二宮七左衛門の推薦によると言われている⁽⁸⁾。城下で働いていても金次郎は、栢山を越えた地域での評判も良いものであったことが推測される。服部十郎兵衛を介して多くの藩士との交流も出来上がり、藩政の改革に対しても積極的に提言し、生活困難に陥っている下級藩士の救済措置として、八朱金の貸下げを受け、五常講に基いて

運営すると言う地域への広がりを持たせた。そして、上記のように、榊の改正の提言も行い城中においても金次郎の評判はいよいよ高まったものと想起されよう。

そこで、大久保忠真は金次郎に対して、大久保家の分家である旗本宇津飢之助の所領、下野国芳賀郡桜町領（物井村、東沼村、横田村）の荒廃村に対してその復興を命じた。

(2) 桜町における金次郎の当面の問題

文政元年11月、酒匂川原において金次郎は小田原藩主大久保忠真から耕作に出精し村の模範ともなる人物として表彰されたことから、同時に表彰された者数名と共に、上記桜町に対して改善見込の見分の命を受ける。その報告書が忠真に採用され、荒廃農村桜町の復興を命じられる。再三に亘って断るが断り切れず、文政4年8月1日、具体的な実地調査を行うことになる。同年9月21日、実際に桜町復興の命を受け、名主役格とされる⁽⁹⁾。

その後文政6年3月に正式に桜町赴任となるまでに金次郎は、現地改善への実在となる問題とは何か。現地がこうまでも荒廃した原因は何処にあるのか。その問題の実在故にそれに対して執り得る仕法とは如何に有るべきなのか。その実在には接近できるのか、その実在が告げる解決の方途は見つかるのか。その具体的な“趣法”構想のために、金次郎は小田原から江戸屋敷、そこから桜町、またその逆回り、または小田原から桜町へまたその逆へと合わせて10回以上にも亘る調査行動を展開している⁽¹⁰⁾。“誠”を以って探求する実在に行き当たるまでは労を厭わず何度でも現場、問題となる対象を見詰め直そうとする金次郎の問題解決への意志と方法とその生活習慣は既に小田原時代にできていたと言えそうである。この調査行動において、早くもこの後実際に見ることになる趣法展開の日々、早朝から起き一軒一軒を丹念に訪ねて回る問題探究の行動、“廻村”という行動を行っていた。そして、短い限られた日時の間に小田原―江戸―桜町という遠距離を10回以上にも亘って、行き来するということは今では想像もできない至難の行為ではあるまいか。

上記のような10回以上にも渡り、しかも眼前にする現地の風景や人々の暮らしぶり、耕地の耕作ぶりやその土地の肥瘠の状態、更に道や橋や堀の状態

等々、また、現地江戸か桜町陣屋での閲覧可能な宇津家の家政記録等の歴史的な史料に対しても丹念に調査して「荒地起返難村舊復之仕法平均御土臺取調之事」（以下「取調之事」）⁽¹¹⁾を作成し、藩主忠真に提出する。この史料は調査した時のままの物ではなく、その後に修正されたものだと言われている⁽¹²⁾。ここではこの「取調之事」に書かれた内容を中心に引き上げ、それとその史料理解を深めるために仕法が実際に展開される過程で陣屋内部の小田原藩から派遣される武士と金次郎との間で確執が持ち上がり、その時金次郎が書いた「役儀伺い」⁽¹³⁾等の資料を参考に用いて、金次郎が仕法を開始するに及んでどんな問題が捉えられていたのかを考えてみたい。

上記「取調之事」を読んでいって見ると、最初に眼に入ってきた言葉がある。それは「廻村」という言葉である。金次郎の仕法の実践は廻村に始まり廻村で終わった、と言えそうである。というのは、まだ任地に赴任する前年の9月7日、「小兵衛才兵衛金次郎下物井村廻村致候」と陣屋日記⁽¹⁴⁾に出ていること、これが役儀上において初めて行った廻村であり、金次郎の最後の仕法任地、日光今市で病身の身体を押して彼は自らの足を用いて廻村しその途中で亡くなっているからである。最後に廻村で亡くなると言うことが、日々流れ行く現実に対し、金次郎が如何に眼前にする事柄その特定の事態に対する対峙から問題を見詰めその実在において核心を捉えようとしていたか、その方途の在り方と自らの有り様とを良く表現していると思われるのである。

金次郎の行う廻村はその村の一軒一軒を隈なく廻り、その家の家族の存在、農作業に必要な農具や堆肥とその小屋、便所や母屋の状態等々注意深く調査していくのである。この調査によってその家の生活状態を見究めていき、その家の人々のつましきや情弱な生活状態、耕作への心配りや放棄の状態、土地柄とその疲弊状態、耕作者の減退、荒地増加、地味低下、水路が塞がり、水が腐り、収穫が減少、暮方困難、道橋の老朽化等々の現象とその原因が捉えられていくのである⁽¹⁵⁾。

身を以て体験自得している金次郎には、土には“徳”が埋め込まれていることを、17歳の時、捨ててあった苗を植えて一俵ものコメを収穫した体験から心底において心得ている。「根源は年々歳々朝より夕まで田畑に出で、耘り耕し蒔き仕付肥灰持運び、作り立て」することで、初めて米が実り、その実

りを自らの手に持つことで初めて徳としての成果が得られたという実感を持つのであり、そのことが農民であることとして当然視している。従って、「収納が減ずれば天然自然に家数人別が減じ」、「また作徳多き時は、人氣は益々進み天然自然に家数人別相増す。」「残穀少なき時は荒地となり」、「残穀多き時は富榮」える⁽¹⁶⁾。

作徳も残穀も納米後に農民の手に残る米のことである。その米が少なければ喘ぎ、多く残れば安堵する。金次郎のような、度重なる酒匂川の洪水の中でそれとの格闘の日々を生きて来た人間にとって、米櫃の中の米の量に対しては敏感であり、仁恕の心も篤く、困窮者に寄り添う心も抑えがたくなる。眼前に広がる荒涼とした農村とそこで窮乏に喘ぐ農民の姿は自らの経験と重ねて他人事ではなかった筈である。金次郎は廻村をすることによって何故にこのような窮乏に陥ったのか、一軒一軒が抱える問題を特定しその改善の方途を探究して行ったのである。

そこで、その原因を表現するために、修正文として加えられたかも知れない、古語の「民惟邦本、本固邦寧」(民は邦の本、本固まりて邦寧ず)と「與其有聚斂之臣寧有盜臣、此謂国不以利、以義為利也」(その収斂の臣あらんよりは寧盗臣あらんこと、これ国利を以て利と為さず、義を以て利為すと言う)⁽¹⁷⁾との二つの文により為政者の心得として言い、また、これからその復興の担当者としての自戒の心得として、古の教えに基づいて問題を述べようとしている。後者の文章は、村の名主などの村役人と郡奉行やその配下の役人などが結託して農事に勤しむ貧しい農民から不当な納米を強要する事例は「桝改正」要求の意図にも出ている。そうした不当な取り立てが行われていた期間それが放置されていたために眼前にする荒廃農村を招いてしまったのだと、金次郎は眼前にする誠が示す問題の所在を言いたいのである。

金次郎が思うには、廻村によって、また眼前に繰り広げられる桜町の状況を見分したところ、桜町3村は衰え、寂れ、住民は生気を失い、今にも崩壊寸前の状態にある。元々元禄享保の頃は納米三千石以上の領地であり、農家の数も400軒以上も在住していた。にもかかわらず、文政4年には納米も人口ともその3分の1にまでに減少してしまった。元来農民は、年々歳々朝より夕まで田畑に出で、草を取り、肥灰持運び、耕し種を蒔き仕付、作物の作り立

てをしている。収穫が少ない時は人力の精根が尽き後の手入れが行届かず後は粗作となる。収穫が多い時は人気も増進し、天然自然に家数とその人別も増えるものである⁽¹⁸⁾。以上の現実はい々の農民の勤苦生活が表現する天然自然の存在である。桜町がこれほど衰えてしまったのは、民を慈しむ政治が行なわれず、現実に移する自然の中での農事という状況を見して、貪り続けたその政治に原因があるのではないかと金次郎は言いたいのである。民は国の本となる存在であり、その国の本である農民を手厚く保護する農政を展開すれば、その本は固まり、つまり、農民が農事に勤しむ力強さも向上するものであり、国は自ずと寧ろものであることは、将に天然自然の真実ではないか、というのである。

ところが現実の農村に対する役人の差配は、農民の農事とその場の現実を見ようとしなくて、また、その農事の成果と役人自らが置かれた現行の誠の真意を考えるのでもなく、唯ひたすら殿様への忠臣だけをまた自らの利益だけを意識して農民を貪り、政治を蔑ろにしている、と金次郎は農民の置かれた実在を読みとってこの「取調之事」をまとめているのである。

文政5年（1822）正月仕法伺い書関連の上納高

	摘 要	田方本免	畑方小物成
A	寛文検地後 元禄12年～享保度	米3,116俵3462	金202両1分2朱 永70文
B	文化9年～文政4年 10か年平均文政5～定免	米962俵2558	金130両2分 永26文3分8厘
A - B	文政5年 荒地減収高	米2,154俵0904	金71両 永918文6分2厘
C (A + B) × 1/2	此の平均 11か年目～定免額	米2,039俵301	金166両1分2朱 永110文6分8厘
D (C - B)	文政5年～ 定免額への復旧増高	米1,077俵0452	金35両 永959文3分1厘

註）「文政五午年御分知字津釺之助様御知行所三カ村荒地起返難村旧復之仕法
取行方奉伺候書付」『全集第10巻』803頁
『二宮町史』通史編Ⅱ 近世2008年569頁

上記の表は、『二宮町史』に掲載されている金次郎が調査した時点での桜町の年貢高推移の歴史的現状と仕法開始後のあるべき状態を数字で表現されるものである⁽¹⁹⁾。その表に基づいた説明によると、数字の出し方は、まず、A、繁栄していた時期の元禄12年（1699）から享保年間の上納額の上限の数字としての、米3,116俵、金202両を置く。この数字に対して、文化文政期の収納額が如何に低迷した状態にあるかを、Bとして、文化9年（1812）から文政4年（1821）までの10年間の収納高の平均、米962俵、金130両を出す。AからBを引いたその差が、文政5年（1822）金次郎が眼前にする現地の荒地化のために減収した落ち込み高となる、米2,154俵、金71両が算出される。このAに対して失われた収納額の数字には領地の経営問題が如実に表現されていると金次郎は観ている。そして、C、天保3年（仕法引受期間終了後の翌年目）からの定免額として、Aの数字とBの数字を足した数字に二分の一を掛けて、米2,039俵、金166両を算出する。この数字が仕法開始後の11年目の上納高の水準にまで達することが予測されている。最後に、D、文政5年目からの定免額への復旧増益額として、Cの数字からBの数字を引いた額、米1,077俵、金35両という額を出し、この数字を上回る事が目標となるとされている。が、実際に上回る事になる⁽²⁰⁾。

上記に算出した数字において大切な数字は、BとCの定免額を出した数字である。Bの数字は文化9年から文政4年までの10か年間の平均額で、米962俵、金130両であり、この数字が天命自然の運数であると規定され定免額として提示される。従って、文政5年（1822）から天保2年（1831）までの10年間の定免（一定の額に規定された年貢高）として提示される。そしてこの10年間は、この定免を超える余剰分の米は冥加米として金次郎の下に下げ置かれ、陣屋で貯蓄管理し、仕法運営上の経費として使いたいと願い出ている⁽²¹⁾。

ここには金次郎が既に意図していることがある。それは領主自らが自己批判をすることである。眼の前の自らが管理経営をしなくてはならない領地の荒廃とそこから上がる年貢の現状とが厳然とした実在として在る。その実在を分別を弁えて謙虚に認識しようとするれば、「入るを量って出を制す」（分度）という家政遣り繰りの方法としてこれしかもはや考えられないこと、領主はその分度を守って家政の立て直しをしなくてはならないことを、反省を含め

て認識する必要があるということである。

しかし、領主としては認められないのは、定免であり、その定免を越えた収穫を冥加米として金次郎に下げ渡すことである。農民は、10年の間は一定の額に規定された上納額を納めることのみ、ということである。それでも農民の側からすれば決められた額以上の収穫物は全て農民の物になるのではなく、陣屋の金次郎の方に納められてしまう。しかし、金次郎としてはこの定免を領主のみの分度として提示していたのではなく、農民にも間接的に分度の効力がいかに働くかを観察していたのかも知れない。農民自身にもその効力を意識する力が出てくれば、農民の自立は可能となる。それまでは毎年、検見を行って領主と農民との取り分を領主と村役人との間で取り決めて来た事柄の不分明さも解消されるし、そのことは農民も分かる筈だと考えていることは間違いないと思われる。

金次郎は、自らの復興後に対する試算では上記の事柄が成し遂げられると考えており、定免とそこに出る余米を冥加米として金次郎へ下し置かれることを承認されたいという姿勢を貫く。領主としては、既に自らが立ちいかぬ現状を放置できない財政状況に陥っていることを深く認識していると、金次郎は考えている。それ故に、領主の方で定免を承認しさえすれば、領主自には一切の出費をさせることなく、領地の土中に埋もれ居る無尽の米、麦、雑穀を増し、その潤沢を以て、用水悪用水の施設を設け、道、橋普請を行い、神社堂寺、並びに家、堆肥小屋、灰小屋を建て直し、入百姓の人別を増し加え、借財を返済し、窮民を撫育し、潰れ百姓を取り立て、川を整備し、山崩れを補い、古荒れ、深荒れに至るまで起返しして復旧しよう、と書かれている⁽²²⁾。これら全てのことについて、金次郎は荒廃した農村で飢渴に喘ぐ農民の立場に立ち、定免こそ現状の窮乏を乗り越え、宇津家の財政を整える最善の道であることを主張し、小田原藩と対決して次の項で上げる最終的な「誓約書」（金次郎と小田原藩が交わした桜町復興仕法に関わる契約）を受けるにいたったと思われるのである。

(3) 改善に取り組む金次郎の活動

① 廻村から見えてくる事柄

文政6年3月28日、金次郎は小田原藩の代官が発行した「誓約書」を携えて、名実ともに任地桜町陣屋に家族と共に赴任する。その誓約書とは以下の通りの内容であった。少し長いけれども、一農民と武士との間で交わされた契約書でありながら、極めて合理的な様子が見られるので上げておきたい。

釵之助様御知行所野州村々立ち直りの儀につき、御趣意これあり、拾ヶ年の間、彼の地引っ越し仰せ附けられ、このたび引き移り候につきては左（下記）の通り

- 一、去る午年より来る卯年迄、拾ヶ年の間、御知行所御物成、米千五俵余、畑方金百二拾七兩三分余、荳・大豆石代金ならびに夫中間金拾七兩余の外は、御任せ年限中、上納に及ばず候
 - 一、御知行所入用、御任せ米二百俵、金五拾兩にて引き受け、年々勘定致すに及ばず候、且つ又、右（上記）米金は、御台所より御足し成され米金と相心得申すべく候
 - 一、彼の地へ引っ越し、拾ヶ年の間は心組み次第一々申し聞くに及ばず候、且つ年限中、小田原へ引っ越し申し付けまじく候
 - 一、御物成御勘定の儀は、拾ヶ年の内は、昨午年上納辻をもって、米永その外共勘定致さるべく候、もっとも荳・大豆石代の儀は、時の相場次第増減これあるべく候
 - 一、格別凶年の年柄は、上納辻制外に候
 - 一、年々割付の儀は、昨午年の通り正業をもって相渡し、もっとも下げ札に増減これあるべく候
- 右（上記）の通り、相心得拾ヶ年の間、出精相勤むべく候、以上
- 文政六年癸未年三月

磯崎丹次郎 茂盈（花押）

高田 才次 武正（花押）

二宮金次郎殿

前書の通り、拾ヶ年の間、任せ置くもの也

釵之助 教成（花押）⁽²³⁾

以上の誓約書は前項で、金次郎が桜町の最初の見分から始まり、赴任の命を受けて実際に担当する者として現地の実地調査を重ねて、自らの条件を付して「取調之事」を藩に提出し、その承認を記した文書である。この文書で大事な事は、「一、去る午年より来る卯年迄、拾ヶ年の間、御知行所御物成、米千五俵余、畑方金百二拾七両三分余荏・大豆石代金ならびに夫中間金拾七両余の外は、御任せ年限中、上納に及ばず候」の最初の文書である。小田原藩は金次郎に対して、定免（一定期間の一定の年貢量）を認め、またそれ以上の余米を冥加米として金次郎に委ねたことである。金次郎が条件として提出した米の量は、米九百六拾二俵である。提示された量は、千五俵になっていた。金次郎はこれを認めたのである。納米が定免であるということと、その余米も金次郎が仕法を展開することに利用が可能となったことは、農民への還元が可能となったということである。そして二番目の文書の中の「御任せ米二百俵、金五拾両」がこれも仕法運営費として利用できるということである。

金次郎の思想には「分度」という自らの生活確立し、豊かな生活内容を得るための方法としての考え方がある。この方法は小田原時代に小田原藩の家老服部十郎兵衛家の家政取直し改革において既に実践している。服部の禄高は通常千二百石であるが実際は403俵の俸禄米であった。金次郎はこの403俵を天然自然の運数と規定し、この数字の範囲内で生活を営み、できるだけその生活を儉約して、その余剰については借金返済に充てるという生活方法を取り、家政の改革を行ったのである。分別を弁え、己の欲心を制限し、一定期間の生活に必要な費用を一定額に保ち、その期間を過ぎて、そこに何がしかの余剰が生まれた場合にはその費用を次期の費用として譲るか貯蓄する乃至は隣人に譲る。このことを金次郎は「推譲」と言っている。自らが必要とする一定額の生活費用を分度としてその金額を固定し、一定期間内の生活はその金額の範囲内に固定徹底して生活を執り行う、という生活方法である。できるだけ儉約を行い、そこにでる余剰分を貯蓄するか他者に譲るという生活姿勢である。

分度に基づいた生活姿勢を貫く方法においてそこに何がしかの余剰分を生み出す生活である。この分度と言う方法を宇津家の定免と言う考え方に適用

したのである。領民が宇津家に定免として納める米の量が即ち分度である。それまでは秋の収穫の折に、郡奉行が藩領にやって来て「検見」を行いその都度の作柄において、領主の取り分と農民に残る分が決められていた。それが武士と村役人に任されていたのであった。それを金次郎は、仕法の始まる文政5年からの10年間、年貢の一定額を定免とすることを領主との間で取り決めたのであった。そして更に、その定免を超える余米についても仕法運営の費用として金次郎に下げ置かれたのである。金次郎の一年以上に渡る入念な調査と藩に対する折衝とによって決定された事柄であり、一農民と武士の間で取り交わされた契約であったことに、並な存在でない金次郎と時代の変化を窺つめる藩主の存在との間に時代を超える意識の流れがあったように思われるのである。

金次郎は、文政4年（1821）9月21日、名主役格として桜町領復興の命を受け、次の年の文政5年9月7日には、早くも同行する陣屋役人武田小兵衛、勝俣才兵衛等と3人で下物井村に入り廻村を行っている。その2日目の9日には、三か村において「出精之者」を各村において選出させ、高札1番の者に鋤1枚、2番の者に鎌2枚、3番の者に鎌1枚をそれぞれに与えている⁽²⁴⁾。

文政6年4月1日には早くも圓蔵を召し連れて3人で廻村を始め、この月の廻村数は17回に及んでいる。その外、様々な問題について村内の各所での見聞なども多く、陣屋には殆どとどまることがない。そして、5月の陣屋日記を見ると、1日に、下物井村の百姓善太郎が農業に出精し、荒地開発に伴い畔を地続きの隣家潰百姓彌市に譲ったことが一通りならず精直であるとし、賞美として米15俵を下し置かれ、3か村の村役人もそこに呼んで、その意味を説明して、田畑の手入れ、荒地の開発、家の掃除に至るまで格別の手回りを致すようにと注意を促している。2日からは、この5月は殆ど毎日のように廻村を行っている⁽²⁵⁾。

次のページの表は、『二宮町史』に掲載されているもの⁽²⁶⁾で、文政10年の1月と2月の「桜町陣屋日記」に記録された金次郎の勤務内容を表記している。と共に、金次郎の村人への行動的な心配りの様子が良く理解できると思われるので利用させていただいた。

月の殆ど日は何らかの勤務に就き、働いていない日はない。廻村のない

日でも、村のどこかを尋ね、そこでの仕事をしながら、村の現状に対する見分には、誠の視線を向け対応する金次郎の行動を彷彿とさせる。この表についてその『二宮町史』は次のように語っている。

「このわずかな記録からだけでも金次郎が役所の中に座っているだけの行政官でなかったことは容易に想像がつく。できるかぎり村を廻り現場を実見する。用水路や道や橋の普請、入百姓の家作、そして用材の伐り出しと運搬、仕事の内容からすれば金次郎が現場に出向かずとも任せて置けばできると思われることが多い。だが、金次郎は連日いくつもの現場を掛け持ちで歩き、現地指導に当たっている。」⁽²⁷⁾と。

この表を見詰めていると、手入れが放置され荒れ果てた道や橋を歩く金次郎には廻村をしながら、自らの眼に飛び込んでくる荒村とそこに住む疲弊農民が抱える様々な問題に対して、それを復興へとどのように導くべきかという問題探索の強い意志の働きが見えてくるのである。

文政 10 年（1827）正～2 月の金次郎出役の記録

月日	勤 務 内 容
1.1	・村役人一同年始祝儀、蓮城院月拝
1.3	・東沼村廻り
1.5	・東沼村廻り
1.6	・知行所村々廻村
1.7	・人日節句祝儀
1.11	・物井村百姓表彰、取締圓蔵同道、3か村廻村
1.13	・横田村星宮代参
1.15	・東沼村観音寺地形見分
1.16	・荒井新平同道、蓮城院御拝
1.17	・東沼村観音寺地形見分
1.18	・荒井新平同道、東沼村観音参詣
1.19	・戊年貢廻米送り状発送
1.20	・荒井新平同道3か村廻村
1.21	・横田村潰屋敷・東沼観音寺見分
1.22	・横田村小嶋用水路堀替え見分
1.23	・東沼村観音寺・和田沼尻新道見分
1.24	・横田村日貫嶋屋敷指図
1.25	・横田村橋掛け
1.26	・横田村日貫嶋道普請
1.27	・横田村日貫嶋道普請
1.28	・荒井共東沼村観音寺普請取計い
1.29	・横田村入百姓家作地形指示
2.1	・横田村入百姓家作大工指示
2.2	・雨天につき休み
2.4	・宇津家年貢廻米
2.5	・前夜から病氣引き込み
2.6	・病氣引き込み
2.7	・病氣引き込み
2.8	・朝から出勤
2.9	・東沼村観音寺屋根葺き見分
2.10	・横田村小嶋西悪水堀普請
2.11	・横田村小嶋西悪水堀普請
2.12	・初午陣屋3か村休日、二宮宅で、荒井・観音寺・圓蔵他集まり御酒、終日
2.13	・横田村小嶋西新堀普請
2.14	・横田村沖村地面堀普請
2.15	・横田村入百姓家作材木伐出し
2.16	・横田村用水普請
2.17	・横田村中島前新道新川普請
2.18	・荒井同道、東沼村廻村
2.19	・横田村入百姓家作材木川流し、廻米送り状
2.20	・横田村入百姓家作普請
2.21	・横田村入百姓家作普請
2.22	・横田村入百姓家作普請
2.23	・東沼村材木川流し
2.24	・東沼村材木川流し
2.25	・横田村用水路普請
2.26	・東沼村新堀普請
2.27	・横田村中島新堀新道普請
2.28	・横田村堀普請完成、酒肴、入百姓引越申付

註)「文政十年桜町御陣屋日記」『全集第3巻』104頁
『二宮町史』通史編Ⅱ 近世2008年598頁

文政5年9月に廻村の後直ちに3ヶ村の農民を集めて各村における出精奇特人をそれぞれの村において選出させ、表彰していることが注目される。今にも倒れそうな飢餓に瀕した農民を眼の前にすれば、「惻隱の情」⁽²⁸⁾の強い金次郎は、即座に身近にある食物やお金を与えるに違いない。しかし状況がたとえそうだからと言って彼は無闇に物や金を与えたりはしない。

後年金次郎は直弟子の富田に次のように語っている。「農民の屋敷内を見れば、その田畑の生き・荒れは、おのずから分かる。また田畑を見れば、その地主である農民の貧富が知れる。なぜかという、農家にとって大切なものは塵芥とか糞尿とか、すべて汚いものである。これを年々貯えて、年々田畑に入れば、おのずから実りが多く、その家は豊かである。ところが、こうした不浄を軽率にして、春中、これを屋敷内に残しておく農家は、田地もやはり荒らし作りである。逆に、田地を見て荒らし作りならば、家もおのずから貧しい。農民の富はどこからくるのか。田地より外にないではないか。その本元である田地を軽んずれば、その家は問うまでもなく貧しい。⁽²⁹⁾」と。

眼の前の状況の中で彼が見ようとしている対象は今にも倒れそうな者の表情だけではない。当座の条件さえ整えば現状を乗り切る意志が当人にあるのかわからないのか、また家族や家の状態、農に立ち返ろうとする意志、周辺農家との関係状態などを複合的に観察しているのである。貧窮に陥り、食物もままならない状況下にある人々には、自分の家に貯められた下肥をも田畑に担いでいく力も或は失っているかもしれない。そのような姿を眼の前にすれば自然と親子の情をもってその人に寄り添い支えることで人の心を振り起こす。しかし、むやみに物を与えることはかえってその人を怠け者にしてしまう⁽³⁰⁾。そのために、極貧の急場を救いながら自立を促していく方法を取ろうとしたのが、桜町で最初にとった出精・奇特人の賞美であったと思われる。

「必ず最初に、その村内で家業に励み、善行をし、人々の手本となるような者を、村民の衆目の視るところによって、入札（投票）で選ばせるがよい。」「善業者を選んで褒賞すれば、他の村民も皆、悪いことをやめて善いことをしようという気が起きる。もし起きなければ、幾年でもそのままにして置くがいい。年数がたつに従って、自然と己が恥ずかしくなって、悪いことをやめる。こうなったら、善人も悪人も平等に善行に向かうようになるのだ。⁽³¹⁾」

土中に埋もれ居る無尽の米、麦、雑穀を取増すことが、金次郎が桜町の農民と共に往く彼の基本的な行動的役割であり、長い間虐げられ働く意欲を失っている農民の生きようとする活力に寄り添い復活させることであった。その為実際に衆目の認める場において「表彰・賞美」を行い、具体的に物を与える「救恤・救済」によって本人の心にゆとりを与え、田畑の未耕作地の耘や耕す仕事に就かせ、未散布の屋内に残る施肥を施させる「奨励・支援」。廻村を通して現状における農作業の進捗状態とその改善状態、それが良好であればその場で賞美し、そうでない場合にはその作業実態に対して知恵を与えるなり指導することで、村々の改善を進めて行くのである。

金次郎が、文政5年（1822）から天保2年（1831）の10年の間に84回も行った農民の労働意欲を鼓舞する活動が上記の『二宮町史』に、「表彰・賞美」「救恤・救済」「奨励・支援」の三項目の下に具体的にどのような行動が行われたのか、また、各項目の下にどのような下し物がされたのかがまとめられているのでそれを紹介しておきたい⁽³²⁾。

「表彰・賞美」された事項

- ①農業に出精する、荒地の開墾、耕作に行届いた手入れ、道路の整備、堀浚い ②減免に頼らない年貢の完納 ③後を嗣者の居ない家の相続 ④借財の返済 ⑤冥加米金の抛出 ⑥村での勤めの担い、耕地の見回り、村内出入り扱いの骨折り ⑦出稼ぎを止め農業に出精 ⑧病人の介護、老父母の介護

◇上記の出精者に対する下し物

農具（鋤・鎌）、農馬・筵機具、米・麦・金・銭・酒・家作料・肥料など
「救恤・救済」に含まれる事項

- ①日々の暮らしの不行届き、極難洪者 ②難洪者の小児養育 ③難洪者の家の修復、屋根替え ④難洪者への食物補助 ⑤拝借金年賦返済の免除

◇上記の救済のために下された物

米とか麦が「御救い米」「萱葺扶持米」「当座凌ぎ米」として支給された
「奨励・支援」に属する事項

- ①荒地の起き返し ②入百姓の一軒相続 ③夜鍋や農閑期での筵織りの奨励

◇上記の奨励・支援に下された物

米・金・銭が「手当て」「賃金」として与えられた

以上の3項目、「表彰・賞美」、「救恤・救済」、「奨励・支援」、の下に行った金次郎の活動は、将に土中に埋もれ居る無尽の「徳」を掘り出すためのものであり、金次郎の歩む「道」が如何に仁恕に満ちたものであり、その場の特定の事柄をそのまま捉え、そこに見えて来た事態に対し、その意味を問い、それに見合う行動を表現として行っていたことであつた。労を厭わず現場を見ようとする廻村を行う意味そのことが良く分かるというものである。

② 農民に寄り添う行動

元禄から享保年間には米三千百拾六俵余、畑方二百貳兩余の年貢を納めていた桜町領が、文政四年には米千五俵余、畑方百二拾七兩余と著しく減少してしまった。その地域に何が起っていたかは仕法引受計画書作成段階で金次郎には十分理解されていたと思われる。と言うのは、既に見て来たように、桜町領の復興を引き受ける10年間の条件として、年貢の領主の取り分を“定免”と提示し、それを承認させようとする文章の語る事実の中に物語られている。

年貢の上限が10年間一定額に継続して維持される言うことは、年貢徴収の際にそれまでのようには現場で徴収する側の“恣意的行為”が介在しないと言うことであり、農民にとっても自立への励みの可能性が示唆されるということである。金次郎にとっても復興の対象である、打ち拉がれ農事への意欲を失いかけて居る農民の心に灯を点す前提条件であり、農事の指導にも大きな意味を持つものであつた。「入るを量って出を制す」という金次郎の分別を弁えるという生活上の基本原則としての「分度」が整えられた桜町において、領主も農民も計画的な生活を行うことが出来るということである。これ以上の農民に寄り添う復興経営の在り方が他に有ったであろうか。分度は大変貴重で重大な領主との決め事である。決められた納米以上の余米は少なくとも今後10年の間は農民に還元されるような領主との間に仕組み創りができたのである。しかし、農民は何十年もの間疲弊のどん底での生活を強いられてきたのである。金次郎はその事も深く理解していて、復興のために金次郎が執った農民に対する最初の具体的な行動が、過酷な生活の中に置かれていても、

日々の農事は勿論の事、家族や隣人にも気を配る奇特の者、出精人を村単位で選出させ、高札者の順に3位までを表彰し、現物を賞品として与えたことにそれが表現されている。その後も年に7～8回以上に渡って表彰と賞品を与える行動が続けられていった⁽³³⁾。

上記のような行動を金次郎が展開したのは、ただ単に物を与えれば良いというものではなかった。金次郎が歩もうとしてきた道には必ず“徳”を創造すると言う意志が存在し、その道を歩み掴んだ徳を自分だけのものにするのではなく家族や親戚や隣人のためにも活かしうる徳の存在として、農民自身にも一人ひとりに掴んでももらいたいとする“自立への思想”確立の呼び水としての賞与であった。その与えた呼び水が実際に生かされて行くかどうかは日々の廻村によって見守り、必要において指導したり励ましたりしていたのではないかと想起される。

その見守り、励ますためにも金次郎の取った具体的な行動は、農民が自らの農事に安心して専念できるための用水や堰や道や橋の普請であり、農家の粗末な便所や雨漏りのする母屋の屋根や塀や壊れそうな床板の修復であり、堆肥や灰小屋、木小屋の設備であった。金次郎が、桜町復興の第一に掲げた目的が農民は農民としての本分を弁え、農事に帰りそれに勤しむことであり⁽³⁴⁾、そのことこそが農民として“田徳”を掴む自然の姿であり⁽³⁵⁾、それによって本人自身が救われるばかりではなくその生き方を、その農民自らが生きる力として再認識できるようすることであった。それが金次郎の基本的立場であったと思われる。

近世後期の農村では、飢饉が何度も続き、土地から離れる者もあれば、離れても再び帰って来る者もあり、その者達も含めて、農村の中から農業従事者としての可能性を見切りをつけて、他の職業に自らの可能性を見いだす者達が徐々に始まっていた。金次郎はそのような兆候にも眼を配り、そうした能力を持つ者は持つ者として位置づけ、復興の一環として仕事を与えて行った⁽³⁶⁾。例えば農村復興とは、荒廃した土地を再開墾して元々の地主を豊かにするとか、荒地未開墾地を開墾してそこを入百姓に与えて人別を増やすことでもあった。こうした荒地を開墾する場合には二つの方法があった。その一つ、「文政7年2月11日、西物井白金坪の忠七組29人分による伝右衛門持分の畑の

起返しがある。彼らはこの開発で賃金三分余と扶持米三斗七升五合を得た。ただ、伝右衛門も開発に従事したが、自身の所持地の開発であるため、彼には賃金が支払われなかった。⁽³⁷⁾とある。伝右衛門1人の力では、開発はなかなか手に負えない荒地の状態にあり、その開発に対して、金次郎が助成の手を差し伸べたのである。そこには、組内の者の「融通」という相互の助け合いの精神を掘り起こし、お互いに協力し合うことが、如何に合理的な開発ができるかという事態を体験させることであったといわれる。併せて賃金や米を得ることによって暮らしに少しでもゆとりを持たせるという目的も考えられていて、その組の者の動員を図り、一緒に働いた者に賃金と米を与えたのである。こうした目的を持つ開発が他の組の者の間でも行われている⁽³⁸⁾。こうした同じ村内での融通を発揮させて相互の協力を生みだし育てる営みが、疲弊村の桜町では失われていて、金次郎はその徳、すなわち人の寄り添う所に生まれる人倫の力を掘り起こそうとしたのである。

他にもう一つの重要なことは、一旦、土地を離れて帰村した者や入百姓の当座の仕事作りにこの開発がその者達に与えられたことである。その当時、同じ村に住みながら、農地を失い、他村への出稼ぎをも止められた者や他村から出稼ぎにくる者が村内の荒地開発に従事するということがあった。この仕事に従事する者達の事を「破畑」と呼んでいる⁽³⁹⁾。この破畑人足による荒地開発がかなりの範囲の面積に達している。例えば、東沼村の破畑竹次郎と直右衛門に従事した開発地の面積を見ると、2町4反2畝14分にも達している。この開発地の所持者は上層民から下層民、そして定着を望む入百姓にまで及び、希望する者に対しては平等に開発の援助の手が回されていたようである⁽⁴⁰⁾。

金次郎は下層民対策として、その下層民を陣屋の長屋に住まわせて、仕法を推進する労働力として使い、その働き手がゆくゆくは彼ら自らが自立できるような方向へと導くことも実践していたという。金次郎が桜町に赴任した当初から中間として陣屋で働く円蔵は、金次郎の指示で、金次や義兵衛、定七、横田村常右衛門、松苗屋を合わせて7名で松苗植えを行っている。金治は酒癖が悪く、その身を改めるために陣屋で働いている。金次郎の指導の下で、長年陣屋で仕法の手足となって働くことによって一軒前の百姓として自立する力を得ることになるのである。文政5年以来、徐々に陣屋で働くものが増え、

文政9年以降、常時5～12名程度の人数が詰めていたといわれる⁽⁴¹⁾。

下層農民には、農間の余業として筵織りや木綿織り等の仕事も奨励している。前者については、文政8年に実施されるはずであった將軍の日光参社が関東の洪水などの影響で、中止となった。既に、人馬徴発に備えて早めに冬田耕作を終えたために、1月、2月に暇が出来、その農間の余業として、秋の米の収穫に備え、筵を一軒につき、20枚を織るよう命じ、それ以上織った者には1枚に着き48文を与え、それ以下の者は1枚につき48文の過料を徴収するものとされていたという。これらは農間に仕事がない農民を救うために意図された収入の道であり、その一方で仕事を前もって準備するという意欲を持つことによって、そこにはさまざまな余業が産み出されるということを教えることでもあり、また、農民の流出を防止することでもあったといわれる⁽⁴²⁾。

前の頁で金次郎の出役の記録を示した表の中に、「横田村入百姓家作地形指示」とか「入百姓家作普請」という標語がでている。これは横田村の寸平のことで⁽⁴³⁾、彼は文政6年(1823)に越後から桜町に入百姓として来た者である。最初は空家に住んで、破畑人足に混じって荒地開発に参加している。文政9年に、多くの田畑を開発し、その田畑の耕作もその手入れも一際行届いて、そこで収穫した作徳米を冥加米として陣屋に納めた。それが金次郎の目に留まり、まだ人別にも身分にも加えられていないのに奇特であるとして、家作料五両を褒美金として与えられている。寸平の働きには金次郎も注目していて、3年の間の作り取りや開発料の扶持米や農具料の下付等も行なわれ、所持地、所持高を増やし、文政10年(1827)には、潰百姓忠左衛門の後式として、屋敷地、住居、灰小屋、農馬等を下付され、東沼村の組頭にまでなったといわれる⁽⁴⁴⁾。

『報徳記』に横田村の名主円蔵の話が出てくる。円蔵は金次郎が桜町に赴任した当時から陣屋で働いていたことは既に述べた。『報徳記』では、その円蔵が金次郎に自分の家の建て替えに20両を借用したいと申し出て、金次郎から咎められる話が出ている。

金次郎は円蔵に対して、村がこのように衰廃してしまったのは名主であるお前にも責任があるではないか、小前の村民が極貧の中で苦しんでいるのに、その救済に先んじてどうして名主であるお前に金が融通できようか、という

話をしている。金次郎は圓蔵に対して、お前は、村を代表する指導者としての立場にある名主や村役人ではないか、その者が、普段から身仕舞いを正し、村の模範となるようなその役割に基づく分別を弁えないとは何事か、とその役割を思い出させるために懇々と道理を話して聞かせる。自らの誤りに気付いた円蔵は、20両を借りたつもりで、その返済額を日々貯蓄して、終に貯まったその額を金次郎の所に持参する。そこで。金次郎はその出精を称賛し、金次郎が円蔵の家を新築して与えるという物語となっている⁽⁴⁵⁾。

上記は単なる物語ではなく、金次郎は名主や村役人、長百姓に対しては指導者としての自覚を持つように指導している。そうした上層農民の中には自らが掴んだ経営の対象を拡大していく者が現われてくる。金次郎はそうした者達にも眼を配り、その者に融資を惜しまず支援を行い、その力を仕法の一環に組み込んでいく。早田旅人によると、西物井村の七郎治に対して金次郎が文政9年と文政11年に特別な扱いと思われる金を貸すという「かし」を行っている⁽⁴⁶⁾。それが一覧表に表記されているので掻い摘んで紹介したい。

その一覧表によると、明らかに七郎治は、米を商いの対象にしていることが分かる。文政9年の2月と3月に干鰯や炭焚・炭引請とあるから炭も扱っている。6月以降には麦、米、大豆の「かし」が表記されている。7月から12月の間は15両が一度、10両が二度、5両前後の「かし」が頻繁に表記されている。

文政11年の表には炭の表記がなく、8月に大豆金として9両2分の「かし」が表記されている。米の購入代金と思われる金が7月頃から12月の間に、上限が20両で、10両単位の額で頻繁に「かし」が表示されている。明らかに米の取引量が文政9年よりも拡大していることが分かる。

文政9年3月25日に、10両のお金を次のような文面において表記されている。「御知行所物井村七郎治、段々御改正相守候様相出精仕候に付、右金子内々拙者より遣候」と。桜町で金次郎が新たに取り組み始めた仕法について、七郎治がそれに基づいて或は協力を惜しまずに出精しているので褒賞として内々に10両を与えられたと言うことが知られる。それに対して、文政11年の表には、陣屋の「入り」の欄に1月に3回「金子不足に付受領」とか、8月に「金子入用に付受領」とか、11月には「江戸納金不足に付時借致候以上」とかの理由で金額が表記されている。陣屋において、急な入り用に対して「不足」

とか「借り」の必要が生じて、七郎治から陣屋にお金が振込まれている。これは明らかに七郎治が陣屋財政に協力している事柄であると言われている⁽⁴⁷⁾。

金次郎は廻村をしながら若者の存在にも目配せしている。横田村の忠右衛門の倅で、久蔵という17歳の若者に目が留まった。その若者は商売に秀でた関心を持つ者なのか、それともその者の持つ算術の能力に優れた将来を見いだしたためなのか、金次郎は久蔵に、「塵劫記など算術書」を与えたといわれる⁽⁴⁸⁾。金次郎は小田原在住の時に、親戚の良く働く若者5人に対する励ましとして、「宗家復興資金」の中から1人100文を与えていたこともあり、復興への総合的な取り組みすらも観えて来て、金次郎の確かな道の歩みが想起されるのである。

3. おわりに

以上に述べてきた金次郎に関わる事柄は、活動期間にしてもその行動内容の取り上げ方にしても、短く粗末なものである。しかし、金次郎の活動視点がどこに向けられていたか、言い換えれば、金次郎の歩もうとする「道」とはどのような活動であったのか、については僅かではあるが述べられたと思われる。

4年ほど前に読んだ、金次郎研究で多くの論考を発表されている早田旅人が「初期報徳仕法の展開」という論文の末尾で次のように語っていることが印象に残っている。それは、「桜町前期仕法の百姓政策は、小田原時代の経験を踏まえた尊徳が、野州に入り込み、小田原城下周辺村とのギャップに苦悩しつつ、現地の百姓たちとむきあうなかで形成されたとかんがえられるのではないだろうか。⁽⁴⁹⁾」と。人間形成が行われた「小田原時代の経験」、それを踏まえて「現地の百姓たちとむきあうなかで」、桜町での「百姓政策」が形成された、と述べているところが印象に残っている。

金次郎を学び始めたころ、最初に眼に飛び込んできた用語が「廻村」という言葉であった。上記に掲げた2か月間の金次郎の勤務状況表を見ても、その作成者も言っているように、彼は陣屋に居ないことはないが、その多くの時間は陣屋外の仕事である農民と共に忙しく立ち回っていて、陣屋に座って

いるような役人ではなかったように思われる。その表からだけでも継続的に行っている行動も観えてくる。例えば、寸平の普段の出精報奨のために建てている家の見分である。忙しい金次郎がわざわざ自ら赴かなくとも代理でも十分要は足りるであろうと思われることでも自らが行動的に立ち回っているように観え、そこに金次郎の観察から得られる徳を重視する道を意識した行動があるように思えてくる。

西田幾多郎は、伊藤仁斎は学問に一種独得の見識をもった人で、日本精神には理よりも事へといふ特徴を捉えているという。例えば、天台宗は極めて理論的な宗教だが、恵心の天真独朗の観法により易行的となり、そこに理より事へと云うことが考えられるといい、その影響で日本的な宗教が起る様になり、仁斎の古学もこのような趣があり、宗儒的な理から孔孟の根本的事実に帰ったと考えられ、ここに学問的方法そのものに、日本的なものがある、と言っている⁽⁵⁰⁾。

恵心の天真独朗の観法と言うのは、広辞苑によると、諸法が天然自然のままに自ずから真理として輝いているということであるようだ。この世のあらゆる物事は、そのものにおいて真理であり、そのもの自らにおいて輝いているということである。金次郎は廻村をしながら、救貧農家の一軒一軒を見分して行くのだが、この家もあの家も貧しいとして見ているのではなく、一軒一軒を一つ一つの事態として、即ち特定の実在として、仁恕の心をもって観察し、その実在の語るところを捉えようとしていると想起できるのである。

と言うのは、廻村は一度で済んでいるのではなく、来る日も来る日も続けられていくのである。そこには観ると言う継続的な意志が働いているのであり、まず、見聞して最初に行うことは、極貧の者には食物を与えるような応急処置をし、その者が自らの生活を取り戻せるような方法としての励まし言葉を与えるであろう。その後もその者がどのような行動を取るようになるかを見続けて行くと言うことが金次郎の丹念な問題への取り組み姿勢として見えてくるのである。

以上のような金次郎の持続的な行動は、見られる側にとっては、監視されていると考える向きもないわけではない。しかし、金次郎が眼前のものごとを観る場合には、そこには既に幼少より培ってきた仁恕の情が働いており、

捉えた実在性が自分本位の解釈のものにならないように他者の眼を介在させるように観ていたのではないと思われる⁽⁵¹⁾。そこには、小田原時代に積んだ経験との違いに苦悩しながら窮民と向き合う金次郎の姿が見えてくるのである。即ち観えてきたものの存在に対して、過去の価値観や流動的なものの見方には囚われずに、将に眼の前の存在が語るままに自らが取り得る行動を実践して行ったと思われるのである。ここに金次郎の単なる情緒にとどまらない実在を見窮める誠の行動があり、そこから産み出される徳が存在し、その徳を以て窮民に寄り添うのが金次郎の歩んだ道であった、と思われるのである。

参考文献

- (1) 福住正兄『二宮翁夜話』児玉幸多訳 中央公論社 2012年 1-2ページ
- (2) 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社 1935年、大藤修『二宮尊徳』吉川弘文館 2015年、二宮康裕『二宮金次郎正伝』モラロジー研究所 2010年等 本稿で述べる金次郎に関する知識の基本的部分は上記の文献によっている
- (3) 大藤修『二宮尊徳』吉川弘文館 2015年 1ページ
- (4) 同上、48ページ
- (5) 松尾公就『二宮尊徳の仕法と藩政改革』勉誠出版 2015年 71-74ページ
- (6) 斎藤高行『二宮先生語録』(下) 佐々井典比古訳 一円融合会 2009年 5-6ページ
- (7) 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社 1935年 68-71ページ
- (8) 松尾、同上、69-70ページ
- (9) 阿部昭『二宮尊徳と桜町仕法―報徳仕法の源流を探る―』随想舎 2017年 86ページ
- (10) 『二宮町史』通史編Ⅱ 近世 2008年 562ページ
- (11) 阿部、同上、91-94ページ
- (12) 阿部、同上、92ページ
- (13) 『二宮尊徳全集』第11巻 仕法桜町領 龍溪書舎 1977年 1170-1175

ページ

- (14) 『二宮尊徳全集』第3巻 日記 龍溪書舎 1977年 2ページ
- (15) 佐々井、同上、100ページ
- (16) 佐々井、同上、89ページ
- (17) 佐々井、同上、89-90ページ、阿部、同上、119-125ページ
- (18) 佐々井、同上、89ページ
- (19) 『二宮町史』通史編Ⅱ 近世 2008年 569ページ
- (20) 同上、569-570ページ
- (21) 同上、569ページ
- (22) 阿部、同上、120ページ『二宮尊徳全集』第10巻 仕法桜町領 龍溪書舎 1977年 805-806ページ
- (23) 『二宮町史』通史編Ⅱ 近世 2008年 575-576ページ この誓約書が
成り立つ過程については阿部、同上、91-109ページに詳しく書かれて
いる
- (24) 同上、579ページ
- (25) 『二宮尊徳全集』第3巻 日記 17-18ページ
- (26) 『二宮町史』通史編Ⅱ 近世 2008年 598ページ
- (27) 同上、599ページ
- (28) 惻隱の情とは、「例えば、井戸に落ちそうな子供をみてだまっておられ
ない、即ち忍びえない心である。」相良亨編『超越の思想』東京大学出
版会 1993年 211ページ
- (29) 富田高慶「訳注 報徳秘録」『かいびゃく』佐々井典比古訳 報徳博物
館 2000年6月 9-10ページ
- (30) 富田、同上、2000年7月 7-9ページ
- (31) 富田、同上、2000年7月 8ページ
- (32) 『二宮町史』通史編Ⅱ 近世 2008年 580-590ページ
- (33) 上記図書の580-590のページ内に掲げられた文政5年から天保2年まで
をまとめた表彰・救恤・奨励として掲げられた項目数による
- (34) この時代は「百姓を農業専従者とする認識」が強調されていた。早田旅
人『報徳仕法と近世社会』東京堂出版 2014年 125ページ

- (35) 富田高慶「訳注 報徳秘録」『かいびゃく』佐々井典比古訳 報徳博物館 2000年6月 9ページ 佐々井信太郎『二宮尊徳の体験と思想』一円融合会 1963年 225-233ページ
 - (36) 早田、同上、144ページ
 - (37) 早田、同上、126ページ
 - (38) 早田、同上、126-127ページ、「このような組による多人数での荒地開発は、開発の負担を個々の百姓から分散し、効率よく開発することができたと考えられる。」と述べられている
 - (39) 早田、同上、120ページ
 - (40) 早田、同上、127-128ページ
 - (41) 早田、同上、133ページ
 - (42) 早田、同上、130-131ページ
 - (43) 『二宮町史』通史編Ⅱ 近世 2008年 599ページ
 - (44) 『栃木県史』通史編5 近世Ⅱ 1984年 903-905ページ
 - (45) 富田高慶『訳注 報徳記』上巻 佐々井典比古訳 一円融合会 1974年 74-79ページ
 - (46) 早田、同上、136-139ページ
 - (47) 早田、同上、139-140ページ
 - (48) 早田、同上、140ページ
 - (49) 早田、同上、145ページ
 - (50) 西田幾多郎『西田幾多郎全集』第12巻 岩波書店 1966年 219ページ
 - (51) 下程勇吉『二宮尊徳の人間学的研究』広池学園事業部 1965年 448-449ページ
- 土田健次郎『「日常」の回復—江戸儒学の「仁」の思想に学ぶ』早稲田大学出版部 2012年 82-83ページ